

学校行事における運動会の教育的役割

—昭和期の横浜市立神橋小学校の事例を中心に—

呉 地 初 美

1 はじめに

本稿は、昭和期の初めから終戦後（昭和5年から昭和25年）における小学校の運動会のプログラムを、時代的背景を踏まえて実施状況、種目名や内容、地域住民の参加等を分析し、運動会の果たす教育的役割の一端を明らかにしようとするものである。

小学校の学校行事において、「運動会は学芸会とともに二大行事の一つ」⁽¹⁾であり、常に地域社会と結びついた学校独自のものであった。特に、運動会は、「学校生活に一定の区切りを設け、地域ぐるみの規模に拡大」⁽²⁾し、実施されてきたものである。今日でもその教育的意義は大きく、現行（平成20年）の小学校習指導要領「特別活動」では、学校行事の2内容（3）健康安全・体育的行事に位置づけられている。

運動会の歴史に関する主な先行研究として、まず、山本信良・今野敏彦の『大正・昭和教育の天皇制イデオロギーⅡ』があげられる。この研究では、学校行事を天皇制イデオロギーを形成した近代日本における「天皇制マツリ」と名付け、皇国民育成の手段としてとらえている。運動会もその枠組みの中で、国家意識・戦意高揚を目指すものであったとする。運動会プログラムについては、主として2つの小学校の明治・大正・昭和期終戦前までの変遷を丁寧に分析し、その特徴を考察している。さらに、今野敏彦は、『「昭和」の学校行事』⁽³⁾において前述の研究を発展させ、大正・昭和初期に至るまでの運動会の特質を、数事例のプログラムの分析を通して、軍隊式方法による皇国民の心身鍛錬を目指した行事であったと結論づけている。また、平田宗史・今林祐次「わが国における運動会の歴史的考察（二）」⁽⁴⁾では、山本・今野の研究を大正・昭和期における全国的な運動会の特徴を明らかにするには事例が少なく不十分であるとして、全国33校のプログラム事例を分析している。時期区分は、大正期から昭和13年頃までと、同15年から19年頃までの2つの区分を設定し、実施形式・時期区分・種目内容を関連させ運動会の特徴を考察している。

しかし、いずれの研究も終戦前で区切られており、終戦後に実施されたプログラムの記述や比較はなされていない。そこで本稿では、先行研究に学びながらも、昭和初期から終戦を跨いで期間（昭和5年から昭和25年まで）の運動会プログラムを分析し、時代的背景を踏まえた上で、地域住民をも巻き込んでいくその教育的役割の一端を明らかにすることを目的とする。

運動会のプログラムは、様々な形で記録・保存されてはいるが、自治体の教育史や県史・市史等に

部分的に記載されているものが多く、管見の限り連続的なものは僅かである。このような状況の下で、本稿では、『横浜市史』に記載されている時代的に比較的連続した記録である横浜市立神橋小学校⁽⁵⁾の事例を中心に取り上げる。特にこの市史には戦後実施されたプログラムが記載されており、これにより運動会の時代による変化の把握が可能になると考える。さらに、事例数に限りがあるが、昭和5年度と同15年度の横浜市内の他の小学校のプログラムと比較することによって、地域的な特徴や共通点を分析していく。なお、時期区分は、①昭和初期から昭和12年の日中戦争の開始頃まで、②戦局が激化する昭和15年から昭和17年頃まで、③終戦後（昭和25年）の3つに分けることとした。その理由として、①の時期は、運動会の種目内容が大正期から継続して安定している時期であること、②は運動会そのものが戦争という時局を色濃く反映し、種目内容や開・閉会式にも変化が生じてくる時期であること、そして戦局の激化による運動会休止の時期を経て、③は終戦後の新しい教育改革の下に開かれた運動会であることによる。

2 昭和初期の運動会

(1) 昭和初期に至るまでの運動会

昭和初期から日中戦争が始まる昭和12年ごろまでの運動会を分析する前に、先行研究をもとに明治期、大正期の運動会の特徴をまとめておく。運動会の始まりは、明治7年3月、海軍幹部養成のための海軍操練所の「海軍兵学寮で行われた生徒競争遊戯」⁽⁶⁾である。運動会はその後、大学・体操伝習所から師範学校・中学校、そして小学校へと普及していく。明治19年4月の「小学校令」により、尋常小学校、高等小学校では体操が必須学科となり兵式体操が重視されるようになる。平田は、明治期小学校運動会の種目内容の特徴を、「綱引きは団体競争の種目として、徒競走は個人競技種目として、この二種目はわが国の明治期小学校運動会を象徴」⁽⁷⁾し、「二人三脚走・障害物競走・フットボールなどの軍事教練の種目は着実に実施」⁽⁸⁾されていたと分析する。また、今野は、明治期の運動会は、「村ぐるみ・町ぐるみのマツリ的なものであり、レクリエーションそのもの」であったが、同時に「臣民としての忠君愛国の心身涵養をめざすためのものであったし、就学奨励・学事奨励をめざしてもいた」⁽⁹⁾として、その特性を指摘している。

大正期になると、大正新教育・大正自由主義教育といわれる児童中心の教育運動が起こる。就学率の向上と小学校令の再改正（明治33年）による体操場の必設規定等により、連合運動会が主であった明治期に比べ学校単独での運動会開催が多くなる。種目内容は、徒競走やリレーといった競走の種目が圧倒的に多く、走り幅跳び・走り高跳び、テニス・バレーボール等を取り入れ、ダンス種目も多彩になる。このように大正期の運動会種目の特徴は、「唱歌遊戯は欠くことのできない種目であり、棒倒しと騎馬戦は種目中の花形であること、加えて伝統的種目である綱引・徒手体操・二人三脚が演じられ、フィナーレは教練」⁽¹⁰⁾であるという。また、来賓の他、未就学児の招待事例もすでにあり、地域をあげての運動会という明治期からの性格が継続され、かつ強く形成されていった。

(2) 昭和初期（昭和5年度から昭和12年度まで）の運動会プログラム

昭和初期の日本は、第一次世界大戦の戦勝国になったものの、大正12年の関東大震災、昭和4年の世界恐慌等により国内の経済は弱体化し、さらに企業の倒産による失業者の激増、労働争議・小作争議の頻発が加わり社会不安が高まっていく。そうした中で国家主義・軍国主義が台頭し、関東軍は昭和6年9月、柳条溝事件に端を発する満州事変を勃発させる。翌年には、海軍の将校らによる五・一五事件が、11年には二・二六事件が起き軍部の独走が続く。さらに、12年7月、盧溝橋事件を契機に中国全土を戦場とした日中戦争が始まる。

このような時代背景の中で、学校行事である運動会も種目内容等を含め徐々に変化を示し始める。

その変化の様子と教育への影響を、横浜市神橋尋常小学校の運動会プログラム（昭和5年度、昭和10年度、昭和12年度）⁽¹¹⁾から分析する。なお、プログラム種目内容は平田・今林の先行研究⁽¹²⁾を参考に、ア) 体操教材・保健体操等の体育的な「体操的種目」、イ) 兵式・軍事教練的な意味を持つ「体錬的種目」、ウ) 純粋な競争の原理に則った個人的・競走種目（以下、「競走的種目」と略記）、エ) レクリエーション的な要素を持つ「遊戯競争的種目」、オ) 競争を直接の目的としない唱歌遊戯・ダンス等の遊戯種目（「ダンス的種目」と略記）、カ) 古来の武芸に関する種目（「武芸的種目」と略記）の6種類に分類した。3つの年度のプログラムを6分類に分けたものが、下表(1)である。

①昭和5年度のプログラムの特徴

神橋尋常小学校（以下、神橋小と略記）の昭和5年度の運動会は、10月13日に開催される。プログラムは全45種目である。児童参加の42種目の内訳は、表(1)のように、ウ)の競走的種目とエ)の遊戯競争的の種目が多く全体の約70%を占める。オ)のダンス的種目は、「チューリップ」、「浜の光」などの名で8種目の記載がある（文末の「表(3) 神橋小学校運動会プログラム」を参照。なお、紙面の制限上種目名のみで実施学年等は省略している）。この種目は、女子は1年生から6年生まで演じているが男子は1・2年生に限定され、3年生以上の男子は旗体操や合同体操、精神作興体操に参加している。伝統的な種目である綱引は男子のみであり、種目による男女差が明白である。この42種目を6分類にあてはめると、ア) 4、イ) 0、ウ) 17、エ) 12、オ) 9、カ) 0となり、個人種目、競走的種目が主であることが確認できる。地域住民の参加種目は、「来賓競走」と「卒業生競走」の2つが掲載されている。

表(1) 神橋尋常小学校 昭和5年度から昭和12年度の運動会プログラム分類

| | ア) 体操的 | イ) 体錬的 | ウ) 競走的 | エ) 遊戯競争的 | オ) ダンス的 | カ) 武芸的 | 計 |
|--------|--------|--------|--------|----------|---------|--------|----|
| 昭和5年度 | 4 | 0 | 17 | 12 | 9 | 0 | 42 |
| 昭和10年度 | 4 | 0 | 15 | 13 | 5 | 0 | 37 |
| 昭和12年度 | 5 | 0 | 15 | 10 | 6 | 0 | 36 |

〔横浜市史Ⅱ資料編8〕をもとに筆者作成。計は児童参加種目数を示す。〕

次に、同年10月13日に運動会を実施した同市内の磯子尋常高等小学校のプログラムを見ていく。プログラム⁽¹³⁾は全59種目、そのうち児童参加は54種目である。種目数は神橋小と比較して多いが、これは尋常小学校だけでなく高等小学校の児童も参加しているからである。分類では、ア) 2, イ) 0, ウ) 18, エ) 24, オ) 10, カ) 0となり、エ)の遊戯競争的種目が最も多く、次いでウ)の競走的種目も多いことが分かる。地域住民の参加は、来賓の他、同窓会女子部・女子青年会、同窓会男子部、青訓（青年訓練所）、青年会等があり、地域一体となった運動会となっている。

このように、2校のプログラムからいえる昭和5年度の特徴は、個人種目、競走的種目が多いこと、戦争を連想させる種目名は、神橋小の遊戯競争的種目に「水兵」と「飛行機」があるが他には見られないことである。また、地域住民の参加については、尋常高等小学校である磯子の方が多く規模も大きい、両校ともにプログラムに参加種目が設定されている。このことは、明治期・大正期からの地域ぐるみの祭的性格を持った運動会という特性が継続されていることを示している。

②昭和10年度のプログラムの特徴

神橋小の昭和10年度の運動会は10月10日に開催されている。プログラムの全42種目のうち児童参加種目は37であり、昭和5年度と比較してみると種目数が若干減少している。これを6分類にあてはめると、ア) 4, イ) 0, ウ) 15, エ) 13, オ) 5, カ) 0となる。ウ)の競走的種目である個人種目が減り、オ)は9種目から5種目にほぼ半減していることが分かる。種目名には、「兵隊ゴッコ」、「吾が友満洲国」、「輝く御旗」等、軍事色を帯びたものが記載されるようになり、地域住民からは来賓、卒業生の他、新たに未就学児と青年団の参加を見る。ここに「青年団」が初めて登場するが、「青年団」は青年教育において自主的に運営された組織であり、半官制下に実施された組織を「補習学校」、「青年訓練所」、「青年学校」等と呼ぶ。そして、それらの青年教育は、「いずれも小学校が活動の舞台であり、指導者も大部分が小学校の教員」⁽¹⁴⁾であり、行事の殆どは学校の行事と合同で行われていた。青年団が運動会種目に参加するようになったのは、青年教育が「小学校教育と相まって、国策上重視」⁽¹⁵⁾され、戦時体制構築のために国民の教化や組織化が重要となったからである。

このように昭和10年度の運動会の特徴は、競走的個人種目やダンスの種目が減り、種目名では、次第に軍事色を帯びたものが増えてきたこと、地域からの参加者は、未就学児から青年団、来賓を含めた層に拡大され、地域一体の参加体制がより強化されたことがあげられる。学校行事である運動会が、地域住民が参加する祝祭の場ではなく教育の場となり、連帯感を意識、戦意を高揚する場に変容してきていることを示すものでもある。これは、昭和5年度のプログラムとの明らかな相違点である。

③昭和12年度のプログラムの特徴

昭和12年7月に日中戦争が始まり、国内では「挙国一致、尽忠報国、堅忍持久」を目標として国民精神総動員運動が展開される。同12年度の運動会は10月5日に開催され、プログラム全41種目のうち児童参加種目は36である。これを6分類にあてはめると、ア) 5, イ) 0, ウ) 15, エ) 10, オ)

6, カ) 0となる。これは昭和10年度と比べると若干の増減が見られるものの、全体としてはほぼ同じ傾向といえる。しかし、ア)の体操的種目では、「ラヂオ体操」, 「選手体操」が新たに加わり、エ)とオ)の種目名では「日本万歳」, 「敵陣突破」, 「救護リレー」, 「神風」, 「日の丸行進曲」, 「軍艦行進曲」, 「建国之栄」等が並び、時局の影響が濃くなっているのが確認できる。また、地域住民の参加種目には、未就学児、来賓、卒業生、青年団が記載され、昭和10年度以降の地域と一体化した教育の場・戦意高揚の場としての運動会が定着していることは明白である。

昭和初期の運動会プログラムを昭和5年度、10年度、12年度と比較したが、昭和5年度を境に、昭和6年ごろから次第に、「競技種目が少しずつ戦時の時局を具体化し実感するもの」⁽¹⁶⁾に変わり始め、特に日中戦争開始後には軍事色のより濃い種目名が増加するという特徴が見られた。また、ダンス的種目も体育上の目的よりも「皇国民育成の要素」⁽¹⁷⁾が強く打ち出されてくる。さらに、運動会が地域住民参加の祝祭の場ではなく教育の場になると同時に、地域一体となった連帯感および戦意高揚の場へと変容してきていることが明らかになった。

3 戦局が激化する昭和15年から昭和17年までの運動会プログラム

昭和12年に始まった日中戦争は長期化し、時代は急激に軍事色を強めていく。国民総動員運動が展開され、その運動方針の一つ一つを学校教育の場で具現化することが主張された。その下における運動会で実践、強化できるものは、「武力戦に於ける強固な体力づくりと精神力の錬磨、思想戦における尽忠愛国の誠と堅忍持久、挙国一致億兆一心精神の錬磨」⁽¹⁸⁾である。そして、これらを実践強化することが運動会の目的であるとする提言が教育現場で実践に移されていく。このような中で、同16年3月「国民学校令」⁽¹⁹⁾が公布され、小学校は国民学校に改称、各教科は、国民科、理科、体錬科、芸能科に統合された。体錬科には体操の他、武道が新設され男子は剣道・柔道が必修、女子は薙刀が選択となる。運動会は戦局の激化に比して軍事色を一層強めた行事になっていく。戦局が教育現場に大きな影を落とす昭和15年度から17年度までの神橋尋常高等小学校・神橋国民学校のプログラムを6分類に分けて示したものが表(2)である。

表(2) 神橋尋常高等小学校・神橋国民学校 昭和15年度から昭和17年度の運動会プログラム分類

| | ア) 体操的 | イ) 体錬的 | ウ) 競走的 | エ) 遊戯競争的 | オ) ダンス的 | カ) 武芸的 | 計 |
|--------|--------|--------|--------|----------|---------|--------|----|
| 昭和15年度 | 5 | 1 | 16 | 14 | 6 | 2 | 44 |
| 昭和16年度 | 6 | 0 | 14 | 7 | 7 | 3 | 37 |
| 昭和17年度 | 3 | 6 | 15 | 15 | 4 | 4 | 47 |

(『横浜市史Ⅱ資料編8』をもとに筆者作成。計は児童参加種目数を示す。)

①昭和 15 年度のプログラムの特徴

昭和 15 年度の運動会は 10 月 15 日に開催される。プログラム全 50 種目のうち児童参加の種目は 44 である。これを 6 分類にあてはめると、ア) 5、イ) 1、ウ) 16、エ) 14、オ) 6、カ) 2 となり、イ) の体錬的種目とカ) 武芸的種目が初めてプログラムに登場する。ア) には新しく「建国体操」が、イ) には「閨団分列」、カ) には「少年武道」と「少女薙刀型」が記載される。さらに、エ) の遊戯競争的種目にも、「爆弾三勇士」、「防火防毒競争」「攻城戦」等の時局を反映した種目名が記されている。また、この年が神武天皇即位紀元二千六百年に当たるとされたことから、オ) のダンス種目には「紀元二千六百年奉祝童謡」、「頌歌二千六百年」等の名が多く取り入れられており、記念行事としての運動会であったことが確認できる。なお、同年度の開会式から国旗掲揚、君が代の他に、新たに「宮城遙拝」と「武運長久祈願一黙禱」が加わり、閉会式では、優勝旗授与の際、「町別競走」の勝者を表彰している。それは、連帯感および戦意高揚の場としてだけでなく、「競争による戦いの場」を強く意識した地域一体の運動会であることを示しており、このことが昭和 15 年度プログラムの大きな特徴になっている。

では、同市内の他校のプログラムはどうであろうか。同年 10 月 2 日に開催された富岡尋常高等小学校のプログラム⁽²⁰⁾を分析する。運動会ではなく、「体錬大会」と名付けられた開会式は、国歌合唱、宮城遙拝、黙禱、校長訓示の後、運動開始となる。プログラム全 56 種目のうち児童参加の種目数は 46 である。6 分類にあてはめると、ア) 6、イ) 2、ウ) 5、エ) 25、オ) 6、カ) 2 となり、ウ) の競走的種目が極めて少なく、エ) の遊戯競争的種目が突出して多い。これは、団体で勝敗を競う集団種目に重点が置かれていることを示している。さらに、種目名も「渡洋爆撃」や「敵倒競走」、「イザ戦場へ」、「担架競走」、「難関突破」等の戦意を鼓舞する名称が神橋小に比べより多く並び、時局を強く意識した「体錬大会」になっている。また、青年団や青年学校男女、学生の参加種目が単独で 10、児童との合同種目が 3 あり、地域住民参加の運動会の様相がより鮮明となっていることも特徴としてあげられる。

②昭和 16 年度のプログラムの特徴

昭和 16 年度から国民学校令により神橋国民学校と改称した。同年度のプログラムの大きな特徴は、「運動会」の名称から「体錬会」と名を変えていることである。10 月 3 日に開催された開会式では、前年度同様に「宮城遙拝」、「国歌奉唱」、「黙禱」が位置づけられている。プログラム全 39 種目は前年度と比べ 11 種目の減、児童参加種目は 37 である。6 分類にあてはめると、ア) 6、イ) 0、ウ) 14、エ) 7、オ) 7、カ) 3 となる。ア) の体操的種目では、「大日本国民体操」と「大日本女子青年体操」が新しく登場し、ウ) の競走的種目は学年に関わらず全て「五十米」、エ) の遊戯競争的種目数は半減する。また、種目名では、「救助競争」、「航空日本の歌」、「海行かば日の御旗」が時局を連想させ、カ) の武道的種目で「柔道」、「薙刀」、「剣道」が体錬科の種目として披露される。連帯感および戦意高揚の場、競争による戦いの場でもあった運動会は、体錬科の誕生を契機に「体錬大会」、「体錬会」と名

を変え、より軍国主義的な傾向が強まる。このことは単なる名称の変更に留まるものではなく、個人の心身の健全な発達を目指すスポーツ精神が「団体としての統制の精神」⁽²¹⁾に転換されていくことを意味する。さらに、武道が錬成教育の重要な一翼として時局を反映する種目になり、地域住民の参加種目では「町別綱引」が記され、一度に多くの住民が連帯と競争の場に加わっている。昭和16年の国民学校令により、教育は大きく変わるのである。

③昭和17年度のプログラムの特徴

昭和17年度の体錬会は10月2日に開催され、プログラムの全種目数は52、児童の参加種目は47と最多である。これを6分類にあてはめると、ア)の体操的種目は前年度より半減し3、イ)の体錬的種目は6に増加、ウ)の競走的種目は15、エ)の遊戯競争的種目15、オ)のダンス的種目はほぼ半減の4、カ)の武道的種目は4となっている。イ)は、昭和15年度に「閲団分列」が初めて登場したが、16年度は0、そして17年度は6（体錬5、団体訓練1）に激増する。オ)は減少し、その分がイ)とカ)に取って代わられていることが確認できる。さらに種目名には、「僕らの愛国号」、「戦ひ抜かう大東亜戦」、「白兵戦」、「棒倒し」、「航空日本ノ歌」、「強イモノ」など戦時色の濃い、あるいは戦場に通ずる訓練的な名ものが並ぶ。このように、17年度のプログラムの特徴は戦争の激化につれて運動会の種目にイ)とカ)が増えて戦時色をより強めていること、種目名も国威発揚的、軍事教練的なものが顕著であることである。地域住民参加の種目には、来賓や幼稚園児の他、「分団別綱引」、「海洋少年団演技」が記載されており、これらの組織体の参加は、「学校教育と不離一体をなし、学校教育に強力な訓練体制の確立」⁽²²⁾を目指すものとなっている。

なお、先行研究によると、長野県駒ヶ根市赤穂国民学校⁽²³⁾では、運動会の選定種目の基準を、①集団的競技を取り入れ、勝敗はその総力によって決定される種目、②集団美、厳正規律ある集団訓練の実が表現される種目、③勇猛果敢の力闘を要する種目、④費用を要しない種目の4つとしているが、これは「全国的に共通するもの」⁽²⁴⁾であった。神橋国民学校の昭和17年度のプログラムとしては、①は綱引、②は体錬や団体訓練、③は騎馬戦や白兵戦、④は徒競走などがその代表としてあげられ、前述の選定種目の基準が「全国的に共通」であることを示している。

以上のように、昭和15年から昭和17年度までのプログラムを分析した特徴は次のようにまとめることができる。戦局の激化と比例するように、一つ目は、個人種目よりも団体種目が重視されていること、二つ目は、種目名に国威発揚的、軍事教練的なものが次第に多くなり、棒を敵と見做す「棒倒し」や「白兵戦」等の競技が戦場に通ずる訓練とされたこと、三つ目は、開会式に宮城遥拝や武運長久祈願、黙禱が取り入れられたことである。また、国民学校令の公布により、学校教育は大きな転換を迎え、運動会プログラムにも大きな影響を与えることになった。

4 終戦後の昭和 25 年度の運動会プログラムの特徴

戦争の激化に伴い、神橋国民学校では昭和 19 年 7 月、港北区に 3 年生以上が集団疎開、同 20 年 5 月に津久井郡に第二次集団疎開をする。このような状況のもと、運動会の記録は昭和 17 年度を最後に終戦までの間、市史には掲載されていない。昭和 20 年 8 月 15 日、敗戦国となった日本は連合国軍の占領下に置かれ、同 22 年 3 月、教育基本法・学校教育法が公布された。教育は一変し、「天皇の臣民を養成」する教育の目的は「人格の完成を目指す」ものになったのである。

学校教育法により横浜市立神橋小学校となった 3 年後の昭和 25 年度の運動会プログラムは次の通りである。名称は「秋季大運動会」となり、開会式、優勝旗返還の後すぐに演技が始まる。全種目数は 37、そのうち児童参加種目は 31 である。比較の意味で児童種目をア) からカ) の 6 分類に分けると、ア) 2、イ) 0、ウ) 9、エ) 13、オ) 6、カ) 0 となる。特徴としては、戦後なのでイ) の体錬的種目とカ) 武芸的種目の 0 は当然であるが、旗取り、鉢巻取り、綱引などの戦前からの遊戯競争的種目は存続していること、しかし、徒競走では児童の発達段階を考慮して 50 ㍎、70 ㍎、100 ㍎となっていること、エ) のダンス的種目は、「風そよぐ朝」、「平和の鳩」、「明るい朝」など爽やかな名のもの、平和を想起させるものが登場することがあげられる。さらに、運動会には地域に住む中学生・幼稚園児等多くの子どもたちが参加している。このことは、地域住民を巻き込んだ戦争礼賛・軍事教練的色彩に染まった運動会（体錬会）を、教育の主体である子どもたちに戻し、地域との結び付きを改めて良好なものにするために、その役割を運動会が担っていることを示すものである。終戦後の運動会プログラムは神橋小学校 1 事例のみで、他との比較はできなかったが、ダンス的種目の名称が一変し、明日への希望や平和をイメージさせるものが掲載されている。また、案内状⁽²⁵⁾の連名からも運動会の民主的な運営が推察される。

なお、戦後の昭和 22 年度から実施される小学校の教科課程と時間数の配当等を記載した「学習指導要領（試案）一般編」が同 22 年 3 月に、また、学年の発達段階と教材を提示した「学校体育指導要綱」⁽²⁶⁾が同年 6 月にいずれも文部省より出されている。前述の昭和 25 年度の運動会はこうした新しい教育課程のもとに開催されたものであり、戦前からの遊戯競争的種目を一部では継続しつつも、新時代の息吹を感じさせる学校行事、運動会へと変わろうとする意志の表れたプログラムになっていることが確認できた。

5 おわりに

本稿は、昭和期の初めから終戦後（昭和 5 年から昭和 25 年）における横浜市立神橋小学校の事例を中心とした運動会プログラムの変遷（表（3））を、時代的背景を踏まえて実施状況、内容、種目名等を分析し、その教育的役割の一端を考察してきた。

表(3) 神橋小学校 運動会プログラム (昭和5年度～昭和25年)

| 横浜市神橋尋常小学校 (S6.9 満州事変) (S.12.7 日中戦争) | | 横浜市神橋尋常 高等小学校 | 横浜市神橋国民学校 (S.16.12 太平洋戦争) | | 横浜市立 神橋小学校 | |
|-----------------------------------------|-------------------------------|------------------|-------------------------------------------------|---------------------------------------------|-----------------------------------------|----------------|
| S5.10.13 | S.10.10.10 | S.12.10.5 | S15.10.15 | S16.10.3 | S17.10.2 | S.25.10.3 |
| 秋季運動会 (第2回) | 秋季運動会 (第7回) | 秋季運動会 (第9回) | 秋季運動会 (第12回) | 秋季体錬会 (第13回) | 秋季体錬会 (第14回) | 秋季大運動会 |
| 第一振鈴 開会之辞 君が代 | 一同整列 開会之辞 君が代(国旗掲 揚) | (同左) | (同左) 国旗掲揚(君が 代) 宮城遥拝 武運長久祈願 (黙禱) | (同左) 国旗掲揚, 宮城 遥拝 国歌奉唱, 黙禱 優勝旗返還 | (同左) 国旗掲揚, 宮城 遥拝 黙禱, 優勝旗返 還 | 開会式 優勝旗返還 |
| 1 綱引 | 全校体操 | 全校体操 | 合同体操 | 合同体操 | 合同体操 | 合同体操 |
| 2 百米徒競走 | 徒競走 | 徒競走 | 徒競走 | 五十米競走 | 徒競走 | 七〇米徒競走 |
| 3 水兵 | ミツキー | 綱引 | 爆弾三勇士 | 綱引 | タスキトリ | 綱引 |
| 4 選手徒競走 | 徒競走 | 徒競走 | 徒競走 | 五十米競走 | 徒競走 | 五〇米徒競走 |
| 5 キックレース | 夕日 | 紅白毬入 | 協力戦 | 五十米競走 | 紅白球入 | 綱引 |
| 6 クワイダン カーク鏡 | 徒競走 | 徒競走 | 徒競走 | 御挨拶(遊) | 徒競走 | 機械体操 |
| 7 百米徒競走 | 破鈴 | 破鈴 | 移動籠球 | 大日本国民体操 | 体錬 | 遊戯(六角橋幼稚園) |
| 8 移動バスケット | 体操 | 徒競走 | 徒競走 | 五十米競走 | 徒競走 | 七夕(遊) |
| 9 百米徒競走 | 徒競走 | 日本万歳 | 日の丸の旗(遊) | 学校・海(遊) | 幼児体操 | 七〇米徒競走 |
| 10 メデイシン ボール | ひよこ | 徒競走 | 徒競走 | 五十米競走 | 徒競走 | 鉢巻取り |
| 11 合同体操 | 徒競走 | 綱引 | 綱引 | 五十米競走 | 体錬 | 五〇米徒競走 |
| 12 百米徒競走 | 綱引 | 徒競走 | 徒競走 | 菊(遊) | 徒競走 | 綱引 |
| 13 ボール送り | 徒競走 | かけっこ(遊) | 精神作興体操 | 五十米競走 | 強走 | 仲良し小道(香 蘭幼) |
| 14 選手徒競走 | 金時さん | 徒競走 | 徒競走 | 大日本女子青年 体操 | 仲ヨシコヨシ | 組立競走 |
| 15 チューリップ | 徒競走 | ボール送り | 綱引 | 五十米競走 | 徒競走 | ダルマ落し |
| 16 五〇米徒競走 | スブンレース | 徒競走 | 徒競走 | 五十米競走 | 帽子取 | 綱引 |
| 17 騎馬擬戦 | 徒競走 | ラヂオ体操 | 紅白毬入れ | 騎馬戦・体操 | 体錬 | 職員対抗リレー |
| 18 紅白バスケット | 兵隊ゴッコ | 徒競走 | 紀元二千六百年 奉祝童謡(遊) | 紅白毬入 | 徒競走 | 風そよぐ朝 |
| 19 山 | 徒競走 | 樽送りリレー | 徒競走 | 柔道 | 足きり | 破鈴 |
| 20 百米徒競走 | 綱引 | 横浜市歌(遊) | 綱引 | 薙刀 | 徒競走 | 地区別リレー予 選 |

| | | | | | | |
|------------|---------|--------------------------------------|------------------|---------------------------------|------------|--------------|
| 21 夕映 | 港 | 徒競走 | 徒競走 | 救助競争 | 僕らの愛国号 | 六角橋中学校生徒 |
| 22 輪抜競走 | 徒競走 | 神風（遊） | 騎馬戦 | 障害物競争 | 徒競走 | 卒業生，父兄一般レース |
| 23 五〇米徒競走 | 福面鬼面 | 徒競走 | 徒競走 | 棒倒し | 源平球入 | のりものごっこ |
| 24 綱引 | 未就学児競走 | 未就学児童競走 | 綱引 | 合同体操 | 徒競走 | 一〇〇米徒競走 |
| 25 五〇米徒競走 | 横浜市歌 | 選手体操 | 防火防毒競走 | 合同体操 | 団体訓練 | 平和の鳩 |
| 26 飛行機 | メドレーリレー | メドレーリレー | 綱引 | 五十米競走 | 片脚相撲 | 三〇米徒競走 |
| 27 百米徒競走 | 精神作興体操 | 精神作興体操 | 健康行進曲（遊） | 仲よしぶらんこ（遊） | 徒競走 | 綱引 |
| 28 カミタスキ | 徒競走 | 日の丸行進曲 | 徒競走 | 五十米競走 | 飛付引合 | 旗取り |
| 29 五〇米徒競走 | サークルリレー | 職員競走 | 棒倒し | 遊戯 | 海 | 障害物競争 |
| 30 メドレーリレー | 徒競走 | 徒競走 | 月（遊） | 五十米競走 | 体錬 | 明るいま朝 |
| 31 綱引 | 吾が友満洲国 | 旗体操 | 少年武道 | 帽子取 | 追入球 | 一〇〇米徒競走 |
| 32 百米徒競走 | 障害物競走 | 軍艦行進曲（遊） | 町別継走 | 航空日本の歌（遊） | 徒競走 | スプーンレース |
| 33 同 | 騎馬合戦 | 敵陣突破 | 合同体操 | 五十米競走 | 剣道 | 綱引 |
| 34 百米徒競走 | 卒業生競走 | 来賓競走 | 徒競走 | 体操 | 戦ひ抜かう大東軍戦 | 目つぶし競走 |
| 35 飛付綱引 | 体操 | 騎馬合戦 | 遊戯 | 影法師（遊） | 分団綱引 | 職員競技 |
| 36 旗体操 | 来賓競走 | 特別競走 | 隣校選手継走 | 五十米競走 | 合同体操 | 母子草 |
| 37 変装競争 | 綱引 | 卒業生競走 | 来賓競走 | 剣道 | 徒競走 | 地域別リレー決勝 |
| 38 スプーンリレー | 青年団競走 | 救護リレー | 徒競走 | 海行かば日の御旗 | ポルカセリーズ | 優勝旗授与 閉会式 |
| 39 精神作興体操 | 特別競走 | 青年団競走 | 頌歌二千六百年 | 町別綱引 | 白兵戦 | |
| 40 卒業生競争 | 職員競走 | 建国之栄（遊） | 職員競走 | 優勝旗授与（町別綱引）、横浜市歌、国旗降納、閉会之辞、万歳三唱 | 体錬 | |
| 41 来賓競走 | 輝く御旗 | メドレーリレー | 救助競争 | | 遊戯 | |
| 42 浜の光 | メドレーリレー | 講評 横浜市歌 （国旗降下） 閉会之辞 万歳三唱 | 徒競走 | | 強イモノ | |
| 43 職員競走 | | | 建国体操 | | 薙刀 | |
| 44 メドレーリレー | （同左） | | 奉祝歌二千六百年 横浜市歌 | | 徒競走 | |
| 45 全校体操 | | | 攻城戦 | | 長縄跳 | |
| 講評，市歌， | | | 46 青年団競争 | | 46 来賓並職員競技 | |

| | | | |
|-----------|-------------------------------------|----------|-----------------------------------------------------------------------------------------------|
| 閉会之辞、万歳三唱 | | 47 卒業生競争 | 47 海洋少年団演技 48 棒倒シ 49 航空日本ノ歌 50 騎馬戦 51 柔道 52 分団別綱引 優勝旗授与、横浜市歌、国旗降納、閉会之辞、万歳三唱 |
| | | 48 少女薙刀型 | |
| | | 49 町別継走 | |
| | 優勝旗授与（町別継走）、唱歌「横浜市歌」、国旗降納、閉会之辞、万歳三唱 | 50 閲団分列 | |
| | | | |
| | | | |

（『横浜市史Ⅱ資料編8』をもとに筆者作成）

戦前の運動会は、地域住民の教育参加の機会を拡大しつつも、国の教育施策に応じて変化していく中で、様々な軍事的要素が取り入れられ、戦局の激化に比例するようにその内容を戦時色に染め上げていったのである。地域住民の集まる祭的性格を持つ場としての運動会は、国の教育施策に応じていく中で、国威発揚や戦争礼賛といった「宣伝機能・伝達機能」の場へと変容していったことが明らかになった。満州事変と日中戦争の開始は、運動会の種目と内容に変化をもたらす契機となり、満州事変以降は時局を反映した種目の増加が改めて確認されている。神橋小でも、昭和5年度以降、種目内容や名称に戦時色・軍事色が次第に色濃くなり、特に同12年度以降はその傾向に拍車がかかった。同16年の国民学校と改称された以降の体錬会では、戦争を模した遊戯的競争種目や武芸種目が最重視され実践されたのである。終戦を迎え、「天皇の臣民の育成」を教育目標に掲げた戦前の運動会は、「人格の育成」を目指す行事に変わり、運動会の持つ教育的役割も大きく転換したことが限られた資料ではあるが明らかになった。

この後、運動会などの課外活動は教育課程の不可欠な要素として重視されるようになり、昭和26年学習指導要領では「教科以外の活動」、即ち「民主的組織の下に、学校全体の児童が学校の経営や活動に協力参加する活動」のひとつと位置づけられたのである。さらに、昭和33年改訂には「学校行事」、そして昭和43年改訂以降は「特別活動（学校行事）」として今日に至っている。今後は、戦後から現在までの特別活動（学校行事）の歴史の変遷について追究することを課題としたい。

注(1) 山本信良・今野敏彦『大正・昭和教育の天皇制イデオロギーⅡ』、新泉社、1977年、287頁。
 (2) 山本・今野『同前書』、288頁。
 (3) 今野敏彦『「昭和」の学校行事』、日本図書センター、1989年。
 (4) 平田宗史・今林裕次「わが国における運動会の歴史的考察（二）」、福岡教育大学紀要第37号第4分冊、1988年。
 (5) 明治19年、神奈川県橋樹郡城郷村立岸根小学校の分校として創立。明治33年、尋常神橋小学校。大正9年、城郷尋常小学校神橋分教場。昭和2年、旧城郷村が横浜市に編入、分教場の位置に神橋尋常小学校を創立。

- 昭和14年、神橋尋常高等小学校、昭和16年、神橋国民学校と改称。昭和20年、戦災により焼失。昭和22年、横浜市立神橋小学校と改称。（創立百年記念誌神橋百年、創立百周年記念誌社会科資料集、昭和61年より）
- (6) 平田宗史・今林裕次「わが国における運動会の歴史的考察（一）—小学校運動会プログラムの変遷（明治期）—」福岡教育大学紀要、第36号、第4分冊、1986年、119頁。
 - (7) 平田・今林『同前書』、106頁。
 - (8) 平田・今林『前掲書』、106頁。
 - (9) 今野『前掲書』、193頁。
 - (10) 今野『前掲書』、196頁。
 - (11) 横浜市総務局史料編纂室編『横浜市史Ⅱ資料編8』、ガリバー、2001年、284～297頁。
 - (12) 平田・今林『前掲書』、69頁。
 - (13) 横浜市教育委員会『横浜市教育史資料編』、ぎょうせい、1981年。333～335頁。
 - (14) 山本・今野『前掲書』、176頁。
 - (15) 山本・今野『前掲書』、176頁。
 - (16) 佐々木正昭「学校の祝祭についての考察」、関西学院大学人文論究55（1）、2005年、110頁。
 - (17) 今野『前掲書』、199頁。
 - (18) 今野『前掲書』、200頁。
 - (19) 国民学校令第一条には「国民学校ハ皇国ノ道ニ則リテ初等普通教育ヲ施シ国民ノ基礎的練成ヲ為スヲ以テ目的トス」と、目的が書かれている。
 - (20) 横浜市教育委員会『前掲書』（注13）、399～401頁。
 - (21) 山本・今野『前掲書』、390頁。
 - (22) 今野『前掲書』、211頁。
 - (23) 赤穂小学校百年史『同前書』、651～652頁。
 - (24) 吉見俊哉、白幡洋三郎、平田宗司等著『運動会と日本近代』、青弓社、1999年、126頁。
 - (25) 案内状は、神橋小学校長、PTA会長、焼失復興会長の連名で出されている。（注11、206頁。）
 - (26) 文部省『学校体育指導要綱』、東京書籍、1947年。「低学年は自然遊戯を基調とした全身的運動や快活な音楽を伴う説話遊戯、模倣遊戯、高学年は団体的・競争的運動が中心になるべき」としている。3頁、7頁。